正しい良心を願い求めよ

ペトロの手紙　一　三章一三節―二二節

二〇一一年八月十四日礼拝説教　秋吉隆雄　牧師

今日与えられました御言葉は、ペトロの手紙一（以下―ペトロ書）三章一三節以下です。この手紙は、冒頭に、イエス・キリストの使徒ペトロが書いたと記されています。しかし本文は、歴史的背景から明らかなように、ペトロが書いたものではない、いわゆる偽名書簡です。ペトロは、紀元六四年にローマで殉教したと伝えられています。彼は、イエス・キリストと同じかたちでは申し訳ないと、頭を下にして「逆さ十字架」で殉教したと言われています。そして、紀元七〇年に、エルサレムの町はローマ軍に包囲され、兵糧攻めに遭って悲惨なかたちで滅びていきました。イスラエルは、この時から国のかたちを失います。キリスト教は、このエルサレムの滅亡期から「キリスト教」として認知されました。それ以前は、ユダヤ教イエス派として見られていました。ですから、ペトロ、パウロの伝道は、ユダヤ教イエス派としての宣教でした。七〇年以降、ユダヤ教ではないキリスト教として宣教活動を続けています。そしてこの頃から、教会内ではローマ帝国のことを「バビロン」と言ったようです。ペトロの手紙でも、ローマをバビロンと言っています。ユダ王国は、紀元前五八七年にバビロンによって滅ぼされ、多くの者がバビロンに捕囚されて苦難の歴史を経験しています。ですから、バビロンとローマは、イ

スラエルを滅ぼした巨大な帝国として認識されています。

ペトロ書は、正確には分からないのですが、九〇年代から二世紀の初めごろ書かれたと考えられています。最初のエルサレム教会が誕生して七〇年、キリスト教と言われ始めて三〇年です。キリスト教は新興宗教でありました。教会の信者たちの誠実で良心的で、愛に溢れた交わりは、多くの人の心を惹きつけました。けれども、誤解と偏見、そして迫害もありました。ペトロ書は、その迫害の中、「クリスチャンは信仰を全うして、良い行いに励んで、他の人々からも受け入れられなさい」と諭す目的で書かれています。ただ、ペトロ書の場合は、その迫害はネロ皇帝やドミティアヌス皇帝の時代のような、組織的な大迫害ではなかったようであります。ヨハネの黙示録は、大迫害の最中に書かれています。ですから、ローマ帝国であるバビロンは、クリスチャンを苦しめ、死に追いやる巨大な力を持つ大怪獣として描かれています。一方、ペトロ書では、「ローマ皇帝を敬いなさい。皇帝が派遣した総督には従いなさい」と社会的な秩序を守って、キリスト教が市民権を得るように、励まし勧める筆遣いで書かれています。けれども、当時のクリスチャンは、誤解と偏見、そして迫害を受けて、苦しい信仰生活を強いられていたことは間違いありません。ですから、このペトロ書の著者は、まず自分たちの信仰の確かさ、喜びを説いています。「家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石になった。」エルサレム神殿の権威ある宗教家たちが、不要、邪魔者として十字架で葬り去ったイエス・キリストが新しい教会の礎になっ

た。イエス・キリストの十字架は、知性において、また、そのかたちにおいては愚かで躓きであるけれども、イエス・キリストの十字架による赦しを信ずる者は、聖なる神の国の国民として大きな憐れみと祝福の中にある。この十字架信仰に立つ時に、素晴らしい救いがあると力強く述べています。

その救いをいただいた者が、今、この時代にどのように生きるのか。これが今日の御言葉の主題です。このような時代的背景を踏まえて聖書を読みますと、著者の思いが、わたしたちの心に伝わってきます。まず最初、ペトロ書の三章一三節から一七節まで、前半の部分をご覧いただきたいと思います。

「もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです。人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません。心の中でキリストを主とあがめなさい。あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。それも、穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい。そうすれば、キリストに結ばれたあなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになるのです。神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。」

本当に美しい励ましの言葉です。まず「もし、善いことに熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう」とあります。この言葉から、迫害に苦しむ状況にはないと言う人がいます

が、これは文学的表現であって、善いことに熱心なクリスチャンは、苦しめられていたのです。ですから、その次に「しかし、義のために苦しみを受けるのであれば、幸いです」と今の置かれた状況を語っています。「義」、正しいことをしたために苦しむ。その者は幸いであると言っています。イエス・キリストは、山上の説教の冒頭の八つの祝福の中で、「義のために迫害される人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」と語っています。今の世の中、金儲けのためにあくせくし、人を見事に騙し、さらに弱い立場の人を痛めつける。そういう話が蔓延しています。たしかに、義のために、正しいことをするために苦しむ人は少ない。これはいつの時代もそうでありましょう。著者は、「義のために苦しむ者は幸いである。その人は、神が生きて支配し給う神の国の只中にある」と勧めています。そして、その人に、「人々を恐れたり、心を乱したりしてはいけません」、世の中で正義を行っていますから、恐れることなく、動揺することなく、真っ直ぐに進みなさい。ただ、その時に、「心の中でキリストを主とあがめなさい」と言っています。心がキリストに向いている。差別と抑圧を排除して、愛と正義と公平を求められたイエス・キリストを「主」と告白する。その人には恐れや動揺はないと言っています。そして、「あなたがたクリスチャンが抱いている希望について説明を求められた時には、いつでも弁明できるように備えていなさい」と勧めています。この時代はローマ帝国が絶頂期を迎えようとしていた時代です。その時、クリスチャンは希望に生きていました。そ

の希望は、政治的な野望を持つという希望ではないでしょう。神に懸けた希望です。民衆にとっては、苦悩に満ちた時代であったでしょうが、その中でクリスチャンは、神に懸けて希望に生きていました。それは、「生きることを喜ぶ」ということでしょう。「あなたがたの喜び、希望はどこから来るのか」と問われた時には、キリストによって示された救いの確かさを「いつでも弁明できるように備えていなさい」、そして、その弁明の言葉は、「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明しなさい」と言うのです。いたずらな争い、また、無意味な憎しみではなくて、「愛をもって良心的に、自分の喜び、望みについて語りなさい」と勧めています。

イエス・キリストは、十字架の死に向かう受難週に、弟子たちにこう語っています。「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる、また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。」その時には、「何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。」クリスチャンの世に対する弁明は、聖霊が導くとイエス・キリストは語っています。ペトロ書の著者は、このことを「穏やかに、敬意をもって、正しい良心で、弁明するようにしなさい」と勧めています。そして、イエス・キリストに結ばれた「あなたがたの善い生活をののしる者たちは、悪口を言ったことで恥じ入るようになるのです」と言っています。迫害する者が、あなたがたの恐れに動揺しない振舞によって、逆に恥じ入るようになる。イエス・

キリストは、受難週に、あらん限りの侮辱と苦しみを受けて、無法な裁きによって葬り去られました。しかし、あの一つ一つの場面を思う時に、裁かれているのは、エルサレム神殿当局の宗教家たちであって、イエス・キリストには微塵の揺らぎもありません。彼らは、悪口を言ったことで恥じ入ることはなかったでしょうけれども、心の中は穏やかではなかったでしょう。正義と愛を貫く、毅然としたイエス・キリストに、慄然とさせられたのではないでしょうか。「神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい。」悪を行う人は、心の中で苦しみます。それは当然です。その苦しみを打ち消そうとして躍起になります。善を行う者も苦しみます。それは、善が善として認められないからです。これらの言葉は、誤解と偏見と迫害の中で生きているクリスチャンに対して、「善をもって悪に勝て」、「キリスト教信仰は、善を行い、希望に生きることである。そのことによって苦しむけれども、その苦しみは大いなる幸いと祝福の中にある」と勧めた言葉です。そして、聖書が語る善や、良心や、希望は個人的なものではなくて、どこまでも他者との関わり、すなわち社会の中で起こってくる善であり、良心であり、希望なのです。このことは大切なことです。信仰を個人的なものとしてしまう時に、それは、必ず独善的なものに落ちてしまいます。神が与えてくださる幸いと祝福は、隣人と共にある中で受け止めることができるのです。そして、後半の一八節から二二節までをご覧いただきたいと思います。

「キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。この箱舟に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通って救われました。この水で前もって表された洗礼は、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです。キリストは、天に上って神の右におられます。天使、また権威や勢力は、キリストの支配に服しているのです。」

一八節に、「キリストも、罪のためにただ一度苦しまれました。正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれたのです。あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです」とあります。この言葉が素晴らしいと思います。著者は、「善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい」と勧めました。しかし、この勧めの言葉は、薄べったい倫理的な勧めではない。また、ヒロイズムでもない。聖書の勧めの言葉は、どこまでもイエス・キリスト、しかもイエス・キリストの十字架という事実から勧められている言葉です。善を行って苦しむ。それは、イエス・キリストは罪の

ために苦しまれた。「正しい方が、正しくない者たちのために苦しまれた」十字架の死を言っています。十字架から勧めの言葉、倫理が生まれてくるのです。

パウロは多くの手紙を書き残しています。それは、彼が伝道した所で起こってきた様々な問題に対して、また、問われた質問に対して答えるかたちで書いています。その手紙は、具体的な悩みの解決を語っていますが、その勧めは、必ず「イエス・キリストの十字架」から言葉を発しています。ペトロ書も全く同じです。彼は、善と、良心と、希望を勧めていますが、その言葉はキリストの十字架から示されています。ですから、ペトロ書はパウロの神学に近いと言われています。イエス・キリストは、正しい方であったけれども、正しくない罪人のために苦しみ、十字架で死なれました。パウロは、ローマの信徒への手紙の中でこう書いています。

「希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」イエス・キリストは、神様に敵対するわたしたち罪人のために、十字架で

死んでくださった。正しい方が、正しくない者のために死んでくださった。このイエス・キリストの十字架の死によって、あなたがたの罪が赦され、神のもとへと導かれたのです。だから、「あなたがたは、キリストの十字架を思って、善を行って苦しみなさい。キリストの十字架と結びつきなさい」と勧めています。「その信仰の中に、真実の幸いと神の祝福がある」と著者は諭しています。キリスト教の倫理は十字架を根底に置いています。このことに尽きると思います。そして著者は、イエス・キリストは肉において十字架で死んだ。しかし、復活して、霊において今も生きる者となった。イエス・キリストは、霊において、わたしたちの只中におられると復活の命を証言しています。

復活したキリストの霊は、捕らわれた霊たち、この「霊たち」と言うのは、人間のことですが、復活したキリストの霊は、人間のところに行って、悔い改めの宣教をした。ところが人間は、その悔い改めの宣教を拒絶した。神の忍耐を無視して、自分本位に生きた。ですから、ノアの洪水の時に、彼らは皆、水に呑まれて滅びた。聖書を書いた人々の信仰は、時空を超えています。復活したキリストの霊が、ノアの時代の人々に対して、忍耐して悔い改めを迫ったことは、時間的にはあり得ない論法です。著者は、このように時間と空間を飛び越えて語ります。そして、ノアとその妻、三人の息子たちとその妻たち、八人が神の命令に従って箱舟を作り、それに乗り込んで洪水から救われた。「水の中を通って救われました」と記しています。

ここから著者は、洗礼、バプテスマのことについて語ります。初代教会においては、洗礼は、体を水の中に沈めて罪に死に、その水の中から引き上げられて、神に向かって生まれ変わる神聖な儀式でした。これは今もそうです。水の中に沈む洗礼式を、ノアの家族八人が洪水を潜り抜け、水の中を通って救われたことと結びつけて説いています。今、著者は、「ノアの家族が洪水から救われたように、あなたがたも洗礼を受けて、水の中を通って救われている。この救いは、キリストの復活によって確かなものとなっている。洗礼によって生まれ変わり、キリストの復活により命を受け継いでいる」と、ノアの洪水と今の洗礼を結び合わせるようなかたちで説いています。これが当時の教会の信仰でありました。そして、ここから洗礼の意味を語ります。

「洗礼は、肉の汚れを取り除くことではない」と言っています。肉の汚れを取り除く洗礼式は、ユダヤ教、またはバプテスマのヨハネの洗礼でした。「汚れ」から「清め」に向かう洗礼です。けれども、ペトロ書の著者は「そうではない」と言っています。肉の汚れは、人が生きている限り取り除くことはできない。それはそうでしょう。わたしたちは、洗礼を受けたからと言って、罪を犯さない人間になったのではない。ですから、「洗礼を受けたから、わたしは正しい人間になった」と思わない。逆にそう思う人は、人を排除し、自分の正しさを傲慢に主張するようになります。洗礼は、「わたしは罪深く弱い者です。あなたの赦しなしには生きることができません」という告白、これが洗礼式です。ですから、

そのような思いの中から、洗礼は「神に正しい良心を願い求めることです」と続きます。神に向かって「神の御心に沿うように、良心を与えてください」と願い求める。洗礼において、イエス・キリストと結びついて、復活の命に与っていく。神との親しい交わりの関係に入っていくことです。ですから、「神様、どうぞあなたの御旨に沿うような、善い心をわたしに与えてください」と砕かれた心で願い求める。「そのような幸いをいただくことが洗礼である」と著者は言っています。

そして、この言葉は、当時の洗礼式の誓約の言葉だったようです。水を潜り抜ける洗礼によって、イエス・キリストの復活の命に与るのです。そして、正しい良心を求め、その良心を生きることを通して、迫害する者たちに対応するのです。そのような苦難の中での信仰を勧めた言葉です。そして最後に、「キリストは、天に上って神の右におられます」とあります。この言葉は、キリストを権威づけた言葉でありますが、その内実は、「神の右」です。すなわち、祝福を与える神の右の御座に座って、そこから人間に確かな祝福を与えてくださっている。このことの神話的な表現です。神の右に座すイエス・キリストの前では、天使、また、もろもろの権威と勢力もすべて服している。十字架の死から復活したイエス・キリストは、罪と死に勝利した方として、すべてを支配しておられる。これはキリスト賛歌です。このキリスト賛歌の中で、「あなたがたの受ける迫害は、何ほどのものでもない」と励ましています。

今日は、ペトロ書の言葉が与えられました。紀元百年前後です。誤解と偏見と迫害を受けながらも、クリスチャンたちは、信仰によって懸命に生きようとしています。彼らの信仰の息吹が、生々しく伝わってきます。ここでは、イエス・キリストは、わたしたち罪人を赦し、救うために十字架で死んでくださった。正しくない者のために、罪人のために、正しい方、イエス・キリストが死んでくださった。この方を思う時に、わたしたちは真に立たせられる。真に立ち、正しい良心を願い求めて、今を生きようとする時に、聖霊を受ける確かな救いがある。このペトロ書の言葉を、今日わたしたちに与えられた言葉として、しっかりと受け止めていきたいと思います。わたしたちは洗礼を受けて、キリストのものとされています。正しい良心を願い求めて生きる者として、神様は必ず立たせてくださいます。これを受け止めていきたいと願います。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉、本当にうれしく思います。あなたがご承知のように、わたしたちは本当に弱く、罪深い者でありますけれども、ただイエス・キリストの十字架によって、わたしたちの罪を贖っていただき、あなたのものとして聖霊の導きの中に置かれています。このことを思う時に、本当に勇気が与えられます。どうぞ、わたしたちを憐れんで、いつもあなたの聖霊に包まれて、前に向かって生きる者とさせてくださいますように祈ります。

今の時代、幸いにも、私たちは信仰のために、社会的に大きな迫害を受けてはいません。このような社会を作るために、先輩た

ちが多くの苦しみを受け、血を流してきました。ですから、神様、わたしたちはこの時代に、あなたの福音を証しする者として、しっかりと立つことができますように、力づけてくださいますように祈ります。今、わたしたちの愛する日本の国は、大きな苦難の中にあります。どうぞこの苦難を乗り越えて、希望に向かって生きる国として立ち上がることができますように、一人ひとりを強めてくださいますように祈ります。日本にたてられている一つ一つの教会が、その事柄に向かってしっかりと肩を組み合って、共に生きる者のあり方を示すことができますようにお示しください。世界には、今なお多くの悲惨な戦いがあり、死の恐怖に怯え、また、飢えに苦しんでいる兄弟姉妹たちがいます。どうぞ彼らを憐れんでくださいますように。イエス・キリストが十字架において、すべて「良し」とし、神様の祝福の中にあるものとしてくださった世界が、それに相応しい世界になることができますように導いてくださいますように祈ります。群れに加えられていることを喜びます。お互いに愛し合い、尊敬し合い、信頼し合って、神の国の姿を現す群れとして立つことができますようにしてください。群れの中には、様々な重荷を負っておられる兄弟姉妹たちがおられます。神様、どうぞあなたが一緒にその重荷を負って、望みに向かうことができますようにお支えください。暑い時、あなたに支えられますように祈ります。また、この八月は、日本の国が悲惨な敗戦を経験した月であります。すべての人が平和を願っています。しかし、この月だけではなくて、いつも平和を求める者と

して、わたしたちをお用いくださいますように祈ります。心からなる感謝、祈り、キリストの御名によって御前にお捧げ申し上げます。アーメン

引用文献

聖書　新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讃美歌２１、日本基督教団出版局、一九九七年四月